人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

現代青少年の逸脱行動と背景要因の検討

――時間的展望に着目して――

福　田　　舞*

The examination of contemporary juvenile deviant behaviors and their background factors

from view point of their time perspective

FUKUTA Mai

abstract

This study examined contemporary juvenile deviant behaviors and their background factors such as teenage-admiration, time perspective, and internal locus of control. The distinction between delinquency and normal behavior is ill defined. Therefore, in order to prevent juvenile delinquency, it is important to investigate normal adolescents' mild deviant behaviors. For this purpose, the research participants were normal adolescents rather than clinical sample. The results showed that juvenile deviant behaviors were significantly associated with teenage-admiration but not with time perspective and internal locus of control. Adolescents do have their dreams or future perspectives. They also regard their lives as controllable. However, they are pessimistic about adulthood and hate becoming adults. They emphasize teenage as an enjoyable moratorium period and their enjoyable experiences often mean deviant behaviors and delinquency. Consequently, for delinquency prevention, the findings suggest that adolescents should have positive image of their futures and adulthood.

Keywords：juvenile,deviant behaviors,teenage-admiration,time perspective,internal locus of control

1．問題と目的

現代の日本社会においては、非行と非行でないものの区別が曖昧になり、非行化することの壁や境界がなくなっているといわれる（川崎，2002；生島，2002ほか）。したがって、いわゆる一般の青少年による軽微な逸脱行動とその背景要因を検討することが、深刻な非行の理解や予防の一助となると思われる。

非行の要因に関しては、これまでに様々な観点から研究がなされてきたが、現代の非行に焦点を当てると、最も頻繁に指摘されるのは規範意識の低下および喪失である（前田，2003）。このような傾向は非行少年だけに特有のものではなく、広く現代の日本社会の特徴として指摘されている（中塚・小川，2004ほか）。そして、現代の青少年は、衝動的で本能的な行動の抑制ができず、欲求のおもむくまま、即時的な欲求を満たすための行動が著しく、刹那主義的な感覚を持つといわれる（桑原，2003）。こうした感覚と深く関わっていると考えられるもののひとつに、時間的展望の問題がある。時間的展望の獲得とは、より遠くの将来や過去の事象が現在の行動

キーワード：青少年、逸脱行動、10代重視の価値観、時間的展望、内的統制観

＊平成19年度生　人間発達科学専攻

に影響を及ぼすという時間的展望の広がりが拡大すること、将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ過去を受容すること、という時間的展望の感覚を持つことをいう（白井，1991）。過去の研究においては、非行少年が現在指向的であり、時間の広がりの範囲も短く、未来に関して無関心であること、特に未来展望を獲得していないということが一貫して指摘されてきた（David et.al，1962；Leshan，1952；山本ら，1968ほか）が、現代では一般の青少年においても、時間的展望、特に未来展望を獲得していないという指摘がある（NHK 世論調査部，1984ほか）。その一方で、現代の青少年は、むしろ未来展望を獲得しているからこそ刹那主義に至るという見解もある（村岡，1996ほか）。現代は、物質的には充足しているものの、さらに高い水準の生活は現実的に求めようもなく、限られた人にしか個人の選択による自己実現の可能性を生かすことができない。このような社会状況の中で、青少年は、早い段階から自分の人生をあきらめ、人生の夢や目標を失っているといわれる（速水，2006；白井，2004ほか）。特に、「若さ」が自分自身の価値と必要以上に結び付けられている女子においては、大人になることへの拒絶感が強く、10代であることが非常な特権となっているようである（福富，1999）。このように、現代の青少年は、大人社会や自分の将来に希望を見出せず、いわば否定的な未来展望を獲得しているがゆえに、10代であることを重視するような刹那的感覚を持つとも考えられる。したがって、現代の青少年の時間的展望の問題を考える際には、単に未来展望を獲得しているかどうかという点だけでなく、10代であることを重視するような刹那的感覚や、自分の人生をある程度自分の力でコントロールすることができるという内的な統制観を考慮することが必要であると思われる。

以上の点から、本研究では、刹那主義的な感覚の行動指標として一般の青少年による軽微な逸脱行動と、その背景要因を時間的展望の観点から検討することを目的とする。

2．方法

A県の高校に通学する１年生から３年生までの生徒445名に、質問紙調査を行った。担任教師により空き時間等に一斉配布し、一部持ち帰りにより実施した。回答内容の機密保持のため、回答は無記名自記式とした。

調査内容は、フェイスシート（性別、学年）、逸脱行動に関する項目（15項目）、時間的展望体験尺度（18項目）、Locus of Control尺度（18項目）、10代重視の価値観に関する項目（６項目）、規範意識に関する項目（11項目）である。なお、時間的展望体験尺度（白井，1994）、Locus of Control尺度（鎌原・樋口・清水，1982）は既存の尺度であり、逸脱行動に関する項目、10代重視の価値観に関する項目、規範意識に関する項目は独自の尺度である。

3．結果と考察

3－1. 尺度に関して

各尺度の因子分析、主成分分析を行った後、各因子の信頼性を検討した。クロンバックのα係数を算出したところ、全ての因子で高い内的整合性が確認された。以下に、今後の分析で用いる因子を記す。

・逸脱行動に関する項目

『自己中心的な迷惑行為』（$\alpha = .84$）、『逸脱・非行』（$\alpha = .83$）の２因子である。なお、逸脱行動に関する項目は、行為の経験値とその行為に対する意識を尋ねている。因子得点が高いほど、経験値の場合には実際の経験値が高く、意識の場合にはその行為をしてはいけないものとみなしていることを意味する。

・時間的展望体験尺度

『目標指向性』（$\alpha = .83$）、『希望』（$\alpha = .68$）、『現在の充実感』（$\alpha = .77$）、『過去受容』（$\alpha = .63$）の４因子である。因子得点が高いほど、それぞれの因子名の特性が高いことを意味する。

・Locus of Control尺度

この尺度は内的統制観を測るためのものであり、尺度得点が高いほど、人生は自分の力でコントロールすることができるものという内的統制観が高いことを意味する。以下、尺度得点を『内的統制観』と記す。

・10代重視の価値観に関する項目

『10代重視の価値観』（α＝.73）の１因子である。因子得点が高いほど、10代を重視する価値観が高いことを意味する。

・規範意識に関する項目

『規範意識』（α＝.84）の1因子である。因子得点が高いほど、規範意識が高いことを意味する。

3－2. 逸脱行動に関して

・逸脱行動の経験値の特徴

ここ１年の逸脱行動の経験値について、逸脱行動の経験が「全くない」「ほとんどない」「時々ある」「よくある」と答えた者の割合を項目ごとに示す（図１）。

「よくある」と答えた者の割合が最も高かった項目は、「授業中、授業とは関係ないことを友達としゃべること」(23.9％）であり、次いで、「ファーストフード店などで、食べ終わっても長時間席を立たないこと」(19.6％）と続いた。経験値の低い項目（「よくある」が１％未満）としては、「公共物に落書きをすること」(0.7％)、「お店の品物をお金を払わずに持ってくること」(0.9％）があげられる。『逸脱・非行』に含まれる項目よりも『自己中心的な迷惑行為』に含まれる項目の方が、全般的に経験値が高い傾向にあった。

『自己中心的な迷惑行為』に含まれる行為は、行為そのものは必ずしも悪いとは言えないが、時と場合によっては他者の迷惑となりふさわしくないものである。また、行為者である青少年にとっては、迷惑をかけている対

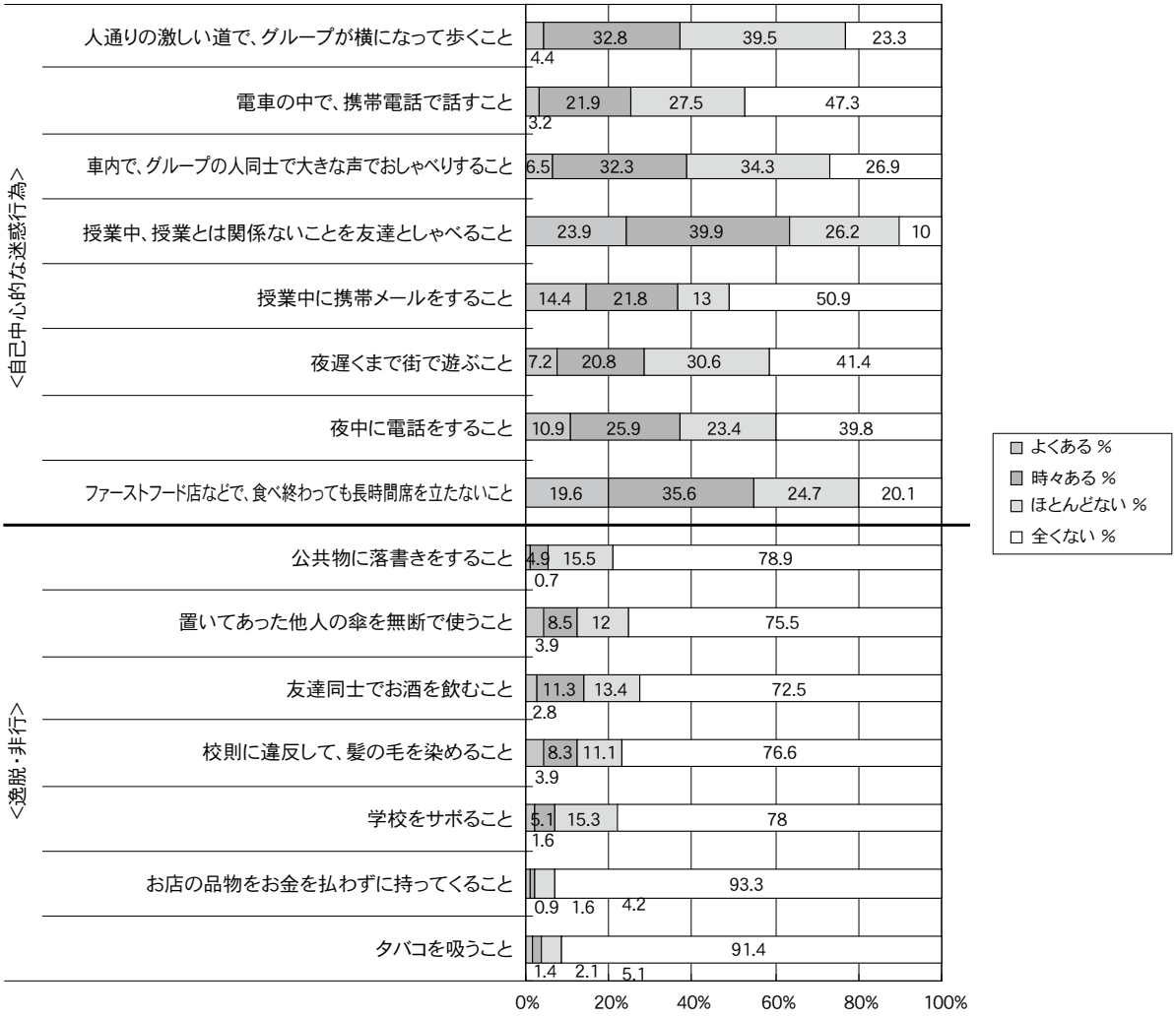

図１．逸脱行動の経験値の割合

象を特定することが難しく、迷惑行為としては捉えにくい行為でもある。一方、『逸脱・非行』に含まれる行為は、校則違反や犯罪行為など明確に禁止されているものであり、いかなる場合でも許されない行為である。実際の経験値から推察すると、社会の中で許されない行為やその程度について、青少年自身が十分に理解しているといえよう。

次に、『自己中心的な迷惑行為』と『逸脱・非行』の因子間の関係を見るため、Pearsonの積率相関係数を求めた。

２つの因子得点間の相関は$r = .61$（$p<.001$）であり、中程度の正の相関関係を示している。

『自己中心的な迷惑行為』と『逸脱・非行』では、逸脱の程度は異なるが両者は関連しており、『自己中心的な迷惑行為』の経験値が高い人ほど『逸脱・非行』の経験値も高いといえる。

・性別、学年による比較

逸脱行動の経験値の性差と学年差を検討するために、２要因の分散分析を行なった。その結果を表１－１、表１－２に示す。

『自己中心的な迷惑行為』、『逸脱・非行』ともに、性別および学年の差による交互作用はなく、『自己中心的な迷惑行為』においては性別と学年両方の、『逸脱・非行』においては学年のみの主効果が有意であった。

性差に関して、『自己中心的な迷惑行為』においては、男子よりも女子の平均値の方が高く、その差は有意であった。『自己中心的な迷惑行為』は、日常的によく見られる比較的軽微な逸脱行動であり、行為者である青少年にとっては迷惑行為とは見なされていない可能性がある。加えて、これらの行為は、１人よりも集団でなされることが想定される行為でもある。したがって、青少年にとって、『自己中心的な迷惑行為』をしてはいけないという意識はもともと低いうえに、男子よりも密着した友人関係を持ちやすいといわれる女子（長沼・落合，1998）においては、友人関係の中でそれらの行為が誘発され、その場の軽いノリでなされている可能性があるだろう。

学年の差に関しては、学年が上がるにつれて平均値も上がる傾向にあり、『自己中心的な迷惑行為』においては1年生と3年生の間で、『逸脱・非行』においては各学年間で、有意差が示された。逸脱行動や非行の項目には、友人と一緒になされるものや、登下校時や放課後になされることが想定されるものが多く含まれている。学年が上がり、友人関係や活動範囲が広がるのにつれて、逸脱行動や非行の経験値も増加するものと考えられる。

表1－1.『自己中心的な迷惑行為』・性別と学年による比較（２要因の分散分析）

高校１年生		高校２年生		高校３年生		F 値		
男子	女子	男子	女子	男子	女子	性別	学年	交互作用
.89	1.24	1.06	1.17	.97	1.61	12.10**	10.31***	n.s.
(.62)	(.65)	(.61)	(.60)	(.62)	(.64)	男子＜女子	高１・高２＜高３	

注）上段：平均値，　下段（　　）：標準偏差，　***p ＜ .001,**p ＜ .01

表1－2.『逸脱・非行』・性別と学年による比較（２要因の分散分析）

高校１年生		高校２年生		高校３年生		F 値		
男子	女子	男子	女子	男子	女子	性別	学年	交互作用
.20	.20	.38	.26	.28	.46	n.s.	9.86***	n.s.
(.43)	(.35)	(.52)	(.41)	(.48)	(.48)		高１＜高２＜高３	

注）上段：平均値，　下段（　　）：標準偏差，　***p ＜ .001,**p ＜ .01

3－3. 時間的展望に関する尺度

・各因子の関係

時間的展望に関する尺度間の関係を見るため、各因子得点間のPearsonの積率相関係数を求めた。その結果を表２に示す。

時間的展望体験尺度の4因子と『内的統制観』は、いずれも中程度の正の相関関係を示している。相関係数の値が最も大きいのは『希望』と『内的統制観』であり、人生を自分の力でコントロールできると考えている人ほ

ど、自分の将来に希望を持っているといえる。一方、『10代重視の価値観』はいずれの因子とも弱い負の相関関係を示している。10代を重視するような刹那的な感覚は、過去から将来までの時間的な見通しを持つことや内的統制観の程度とはあまり関係がないようである。

表2. 時間的展望に関する各尺度間の相関

	1	2	3	4	5
＜時間的展望体験尺度＞					
1　目標志向性					
2　希望	.64***				
3　現在の充実感	.24***	.37***			
4　過去受容	.11**	.20***	.26***		
＜Locus of Control尺度＞					
5　内的統制観	.37***	.43***	.31***	.30***	
6　10代重視の価値観	-.19***	-.18***	-.19***	-.12**	-.27***

***p<.001,**p<.005

3－4. 逸脱行動の経験値と各尺度との関連

・逸脱行動の経験値と各尺度の関係

逸脱行動の経験値と関連の強い尺度を明らかにするため、各因子間のPearsonの積率相関係数を求めた。その結果を表３に示す。

逸脱行動の経験値（『自己中心的な迷惑行為』と『逸脱・非行』）との相関が高かったものは、『迷惑行為に対する意識』（それぞれ、r＝－.59、r＝－.61）、『規範意識』（r＝－.49、r＝－.47）、『10代重視の価値観』（r＝.47、r＝.40）であった。時間的展望体験尺度の４因子と『内的統制観』はほぼ無相関であった。

表3. 逸脱行動の経験値と各尺度間の相関係数

	逸脱行動の経験値	
	自己中心的な迷惑行為	逸脱・非行
逸脱行動に対する意識	-.59***	-.61***
＜時間的展望体験尺度＞		
1　目標志向性	.01	-.04
2　希望	.05	.04
3　現在の充実感	-.04	-.07
4　過去受容	-.02	-.09
＜ Locus of Control 尺度＞		
5　内的統制観	-.05	-.08
6　10 代重視の価値観	.47***	.40***
7　規範意識	-.49***	-.47***

***p<.001

・逸脱行動の経験値と関連のある変数の検討

逸脱行動の経験値と各尺度との相関関係をふまえ、逸脱行動の経験値と直接的な関連のある変数を明らかにするために、逸脱行動の経験値を目的変数、『逸脱行動に対する意識』、時間的展望体験尺度の４因子、『内的統制観』、『10代重視の価値観』、『規範意識』を説明変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。なお、時間的展望体験尺度と『内的統制観』は、逸脱行動の経験値とほぼ無相関の関係であったが、先行研究においては非行少年の特性として指摘されている要因でもあるため、重回帰分析においても引き続き説明変数として用いることとした。その結果を表４－１、表４－２に示す。

『自己中心的な迷惑行為』、『逸脱・非行』ともに、『逸脱行動に対する意識』、『10代重視の価値観』、『規範意識』、『内的統制観』の順で、逸脱行動の経験値に対する回帰係数の値が大きいことが明らかとなった。逸脱行動に対する意識や規範意識の、経験値への寄与の高さからは、青少年にとって、行為に対する意識と実際の経験値との

間に大きな矛盾がないものと考えられる。なお、時間的展望体験尺度の下位因子である『目標指向性』、『希望』、『現在の充実感』、『過去受容』のいずれにおいても、逸脱行動の経験値との直接的な関連は示されなかった。過去の研究においては、非行少年が未来展望を持たず、現在指向的であることが指摘されてきた（勝俣ら，1982；河野，1994ほか）が、今回は先行研究とは異なる結果となった。このような結果の違いには、被験者の属性の違いが影響している可能性がある。時間的展望に関する先行研究では、少年院や少年鑑別所に収容されている少年を調査対象としている（勝俣ら，1982；上田ら，1980ほか）が、本研究の被験者は高校へ通う一般の青少年であり、逸脱行動や非行の経験値が高い場合であっても、臨床群と比較すれば逸脱の程度は軽微であるといえる。こうした違いが、今回の結果に反映されているとも考えられる。

本研究においては、時間的展望に関する尺度の中で、逸脱行動の経験値への寄与が最も高かったのは『10代重視の価値観』である。一般の青少年においては、単に時間的展望を獲得しているかどうかということよりも、10代に価値を置いているかどうかということの方が、実際の逸脱行動や非行に影響を及ぼす可能性があると考えられる。また、『10代重視の価値観』は、他に経験値への寄与の高い『逸脱行動に対する意識』や『規範意識』とは異なり、行為そのものの評価や規範軸とは別個の概念である。このような価値観が実際の行為と直接的な関連が強いという結果は、注目に値すると思われる。

表4－1.『自己中心的な迷惑行為』を目的変数とする重回帰分析結果

1	逸脱行動に対する意識	-.41***
2	10 代重視の価値観	.34***
3	規範意識	-.16**
4	内的統制観	.13**
	R^2	.48
	F 値	42.00***

注 1）数字は標準化係数 β を示す。
注 2）***p<.001,**p<.01

表4－2.『逸脱・非行』を目的変数とする重回帰分析結果

1	逸脱行動に対する意識	-.46***
2	10 代重視の価値観	.24***
3	規範意識	-.14**
4	内的統制観	.12**
	R^2	.45
	F 値	37.71***

注 1）数字は標準化係数 β を示す。
注 2）***p<.001,**p<.01

3－5.　10代重視の価値観に関して

以上の結果より、一般の青少年の逸脱行動や非行において、『10代重視の価値観』は重要な要因の一つであることが示唆された。そこで、10代を重視する価値観が逸脱行動や非行とどのように結びつくのかを検討するために、ここで『10代重視の価値観』について検討することとした。

・10代重視の価値観の特徴

『10代重視の価値観』について、10代を重視することが時間的展望、特に未来展望を獲得していないこととどのように異なるのか、青少年にとって10代であることがどのように価値付けられているのか、といった点を検討するため、『10代重視の価値観』の項目ごとの分析を行なった。

各項目について、「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」と答えた者の割合をそれぞれ示す（図２）。

「そう思う」と答えた者の割合が最も高かった項目は、「10代のうちに、遊べるだけ遊んでおくべきだ」(51.2%)であり、次いで、「ずっと10代でいたい」(45.8%)、「10代の今を楽しめていないと焦る」(17.4%)と続いた。「そう思う」「ややそう思う」という回答を合わせると、約9割の青少年が「10代のうちに、遊べるだけ遊んでおくべきだ」と、7割の青少年が「ずっと10代でいたい」と考えていることになり、多くの青少年にとって10代が人生の中でも特別な時期であり、10代であることの特権意識を持っていることがうかがえる。一方、「将来のために今を犠牲にするよりも、今を楽しむことの方が大切だ」や「将来どうなるか考えるよりも、とりあえず今やりたいことをやるべきだ」といった、10代である今と将来を比較したうえでなお今だけに価値を置くような項目では、「そう思わない」「ややそう思わない」という否定的な意見の割合が多い。これは、現代の青少年の特徴として述べられてきた、将来への見通しなく、ただ今さえ楽しければいいといった刹那的感覚とは異なる結果であるといえる。むしろ、将来を見通しているからこそ、社会へ出る前のモラトリアム期である10代のうちに出来るだけ人生を楽しんでおこうとする傾向（村岡，1996）に近いものと思われる。「ずっと10代でいたい」というのはあくまでも願望であり、いずれは社会へ出て、大人にならなければならない現実を青少年自身がよく分かっているからこそ、こうした願望を一層強く持つようになるのかも知れない。

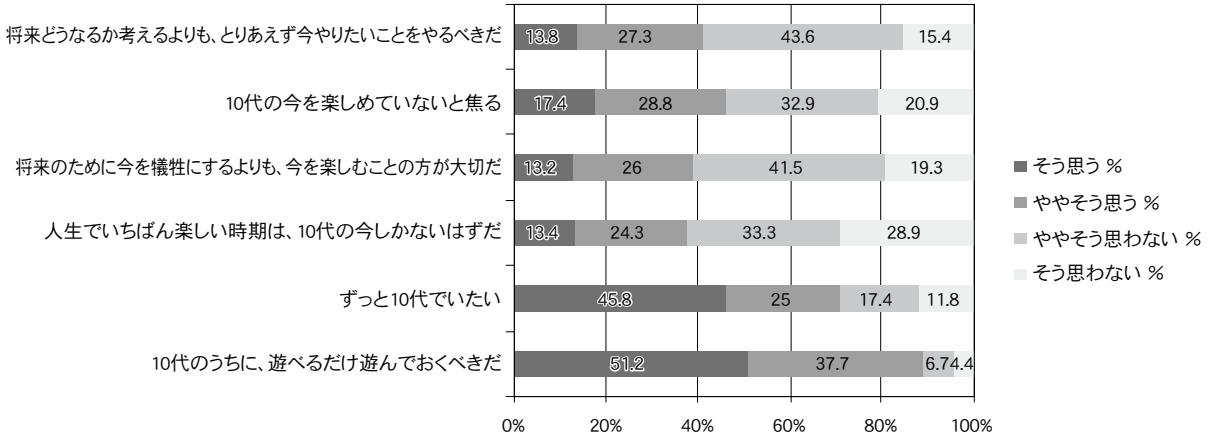

図２．10代重視の価値観の割合

・性別、学年による比較

10代重視の価値観の性差と学年差を検討するために、２要因の分散分析を行なった。その結果を表５に示す。

性別と学年の差による交互作用はなく、学年のみの主効果が有意であった。

性差に関して、男子よりも女子の平均値の方が高い傾向にあるが、有意差は示されなかった。一般に、「若さ」が自身の価値と結び付けられ、「加齢不安」を抱きやすいのは、女子の場合がほとんどであるといわれる（福富，1999)。したがって、男子よりも女子の方が10代であることへのこだわりが強いことが予想されたが、今回の結果はその予想とは異なるものであった。10代を楽しみたい、10代でいたいという気持ちが、大人になることへの否定的なイメージによるものであるとすれば、大人になることのプレッシャーは男女ともに存在すると考えられる。その中で、10代が特別な時期であるということは、男女ともに変らないのであろう。

学年の差に関しては、学年が上がるにつれて平均値も上がる傾向にあり、１年生と３年生の間で有意差が示された。10代重視の価値観が将来の厳しさを見通してのものだと考えると、この差は興味深い。高校１年生と３年生では、３年生の方が社会へ出る時期が近付き、10代の終わりをより強く意識するために、遊べるのは今のうち、今のうちに遊んでおこうといった感覚が強まるのではないだろうか。たった２年の差ではあるが、特に女子の場合は「高校を出たらオバサン」と言われることもある（黒沼，1996)。青少年にとっての旬な時期はそれほどに短いのであり、彼らにとっての２年の差は非常に大きなものとして捉えられているのではないだろうか。

表５.『10代重視の価値観』・性別と学年による比較（２要因の分散分析）

高校１年生		高校２年生		高校３年生		F 値		
男子	女子	男子	女子	男子	女子	性別	学年	交互作用
2.45	2.59	2.73	2.63	2.58	2.81	n.s.	5.75**	n.s.
(.69)	(.62)	(.58)	(.54)	(.65)	(.63)		高１＜高３	

注）上段：平均値，　下段（　　）：標準偏差，　　***p ＜ .001,**p ＜ .01

４．総合考察

本研究は、一般の青少年の逸脱行動の背景要因を時間的展望の観点から検討することを目的としたものである。本研究の結果からは、時間的展望に関して、時間的展望を獲得しているかどうか、内的統制観を持っているかどうかということよりも、10代に価値を置いていることの方が、逸脱の程度に関わらず、一般の青少年の逸脱行動の経験値との関連が強いことが示された。

『10代重視の価値観』が時間的展望体験尺度や『内的統制観』と関連が低かったことを見ると、現代の青少年の持つ刹那的感覚は、将来に対して無頓着であることや、自分の人生を自分自身の力でコントロールすることが出来ないといった内的統制観の低さから来るものとは異なるようである。刹那的な感覚を持つ青少年が、将来のことを全く考えていない訳ではないし、自分の力で人生を切り開くことが不可能だと考えている訳でもないだろう。ただし、「ずっと10代でいたい」という想いの背景には、大人になり、社会に出ることに関して何かしら否定的なイメージを抱いている可能性があると思われる。塩谷 (2002) は、非行少年の心理の一つの特徴として、「大人になりたくない、苦労や責任を負うことは避けたい」、「できれば子どものままで、自由で責任を負わないでいたい」という、大人になることへの不安や不信の念をあげている。このような感覚は、本研究の『10代重視の価値観』と通じるものがあると思われる。青少年にとって、大人社会は自分の夢を叶える場であるよりも、苦労や責任を負わなければならない面倒な世界である一方で、10代は、遊べるだけ遊んでおくべき、無責任の許される自由な時代として捉えられているのではないだろうか。10代には、将来への過程としてよりも、将来とは切り離された特別な時代としての価値が置かれているように思われる。

ここで考慮すべきは、青少年にとっての遊ぶこと、楽しむことが逸脱行動や非行と結びついている可能性である。吉田ら（1999）は、平成２年と９年の非行少年対象の調査結果を比較分析し、「非行自体が、強い不適応感を背景としたものというよりは、遊行費欲しさや仲間に誘われてというように、安易な動機のものが多くなってきた」と述べている。このように、現代の少年非行の特徴として、遊びの延長やゲーム感覚といった動機はよく指摘されるものである（桑原，2003ほか）。本研究の『10代重視の価値観』と逸脱行動の経験値との関連の強さを考えると、10代に価値を置くことが実際の逸脱行動や非行を誘発している可能性が示唆される。10代のうちに遊んでおくべきという考えが、10代のうちならば多少の逸脱や非行も許されるという感覚を生み出しているのではないだろうか。逸脱行動や非行に関して、行為の善し悪しは青少年自身がよく理解しているようであるが、そのような行為を大人になってするのと10代のうちにするのとでは、青少年自身の感じる重みが異なることが推察される。青少年にとっての10代は、そうした意味での自由が許される、特別な時代であるといえよう。

逸脱行動や非行の予防という面から見れば、青少年が大人になることや社会に出ることに対してポジティブなイメージを持てることが重要であると思われる。青少年が大人社会に抱くイメージは、青少年自身の問題というよりも社会全体の問題であるといえる。大人の側が、青少年の感覚や価値観を丁寧に汲み取り、対応することが大切であるだろう。

＊引用・参考文献

Davids,A.,Kidder,C.,&Reich,M.　1962　Time orientation in male and female juvenile delinquents.　*Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 239－240.

福富　護　1999　現代の青少年の特質―『援助交際』に対する女子高校生の意識とその背景要因の分析を通して―　更生保護，50（12），6－11.

速水敏彦　2006　他人を見下す若者たち　講談社現代新書.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982　Locus of Control尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討　教育心理学研究，30，302－307.

勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり　1982　非行少年の時間的展望―少年鑑別所収容少年の場合―熊本大学教育学部紀要（人文科学），31，267－277.

川崎道子　2002　少年非行の変遷と非行臨床家の役割　こころの科学，102，22－27.

河野荘子　1994　なぜ、非行少年は過去の体験を未来に生かそうとしないのか―時間的不連続性と原因帰属からの検討　犯罪心理学研究，32（2），1－10.

黒沼克史　1996　援助交際―女子中高生の危険な放課後―　文芸春秋.

桑原尚佐　2003　非行少年とモラル―非行少年に見られるモラルの変遷！？―　教育と医学，51，435－442.

Leshan.L.L　1952　Time orientation and social class.　*Journal of Abnormal and Social Psychology*，47，589－592.

前田雅英　2003　日本の治安は再生できるか　筑摩書房.

村岡清子　1996　少女のゆくえ―インタビューの向こうに見えるもの―　青樹社.

中塚善次郎・小川　敦　2004　現代日本における規範意識の喪失―自己・他己双対理論による検討―　鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編），19，9－23.

NHK世論調査部（編）　1984　中学生・高校生の意識　日本放送出版協会.

長沼恭子・落合良行　1998　同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究，10，35－47.

塩谷治彦　2002　大衆社会と非行についての考察　犯罪心理学研究，36（2），30－31.

白井利明　1991　青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連　心理学研究，62，260－263.

白井利明　1994　時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，65，54－60.

白井利明　2004　現代社会において大人になる難しさと可能性　発達，25（100），86－92.

生島　浩　2002　非行臨床の今日的課題　こころの科学，102，16－21.

上田一博・白鳥　哲・大吉行秀・園部博範・勝俣暎史　1980　非行少年の理解のための時間的展望テスト（T.P.T）の適用（その2）　厚生省児童家族局（監）　児童相談事例集12，137－156，日本児童協会.

山本晴雄・松本恒之・小宮山　要・渥美冷子・新田健一・台　利夫　1968　非行性とその形成　依田　新（編）　現代青年の人格形成　金子書房，210－239.

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森　久美子・石田靖彦・北折充隆　1999　社会的迷惑に関する研究（1）　名古屋大学教育学部紀要（心理学），43，53－73.